

目的

那珂川のアユ資源を持続的に活用するためには、漁獲の動向を把握した上で適正な漁場運営を行う必要がある。そこで今年度も引き続き、那珂川におけるアユの漁獲状況に関する情報を収集した。

材料および方法

**友釣りによる漁獲状況** 栃木県那珂川漁業協同組合連合会会員 4 漁協に対し、調査票 150 枚を前年度の賦課金納入者数の割合に応じて配布した。各漁協がそれぞれ選定した調査員に対し、平成 30 年 6 月 1 日の釣り解禁日から 11 月 10 日までの間、釣行日の釣獲地区（本流 7 地区および 4 支流の計 11 区域；図 1）および釣獲尾数（釣果なしも含む）の記録を依頼した。無記入の調査票は、出漁日数を 0 として扱った。なお、回収率は 62.7%であった。

**投網による漁獲状況** 釣りと同様の方法で調査票 50 枚を配布し、漁獲重量の調査を行った（投網は 7 月 10 日から区間毎に順次解禁される）。なお、回収率は 70.0%であった。

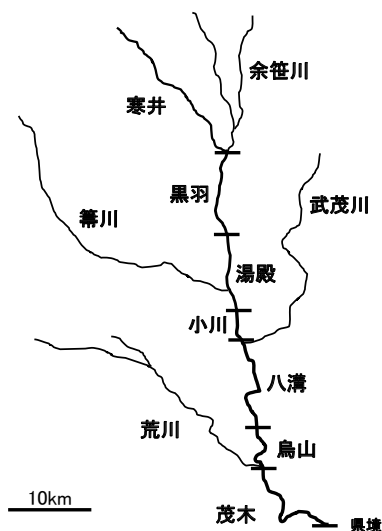


図 1 那珂川における釣獲地区の区分

結果および考察

**釣れ具合・獲れ具合** 漁期を通じた釣れ具合は 10.4 尾/人/日で、前年（9.2 尾/人/日）から回復し、ほぼ平年並み（10.0 尾/人/日）だった（図 2）。解禁日の釣れ具合は 9.8 尾/人/日で平年（9.8 尾/人/日）並みだった（図 3）。月別の推移を見ると、漁期前半の 6～7 月は平年より高く、8～9 月はほぼ平年並みとなった（図 4）。地区

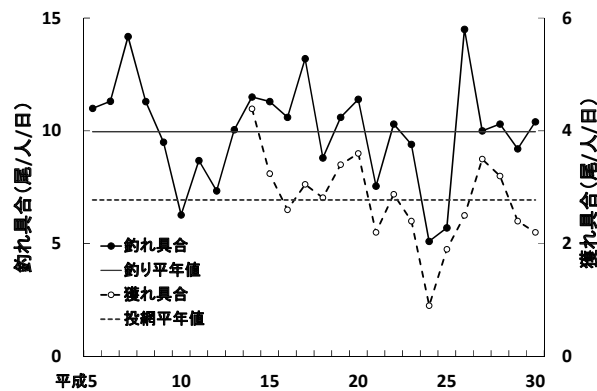


図 2 釣れ具合および獲れ具合の経年変化

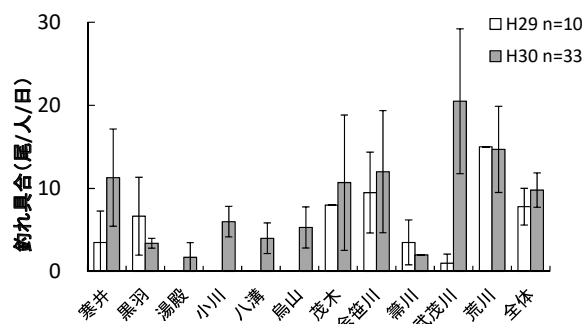


図 3 地区別の釣れ具合（解禁日）  
エラーバーは標準偏差を示す。

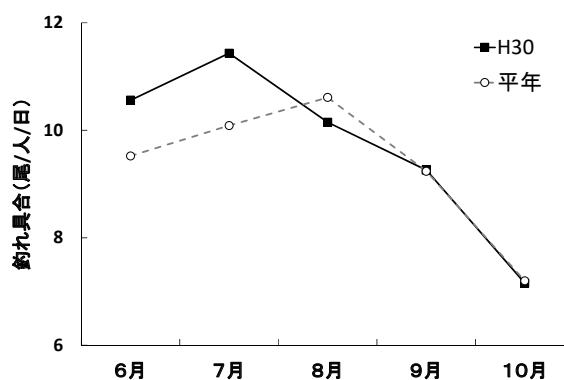


図 4 釣れ具合の月別の推移

別に見ると、解禁日には全体的に前年に比べて高く（図 3）、出漁した調査員も前年の約 3 倍となった。漁期を通して見ると、茂木、余笹川、荒川で前年を下回ったが、全体的には前年を上回っていた。特に湯殿から鳥山にかけて、前年に比べて高い結果となった（図 5）。

投網による獲れ具合は 2.2kg/人/日で、前年（2.4kg/

人/日) とほぼ同様、平年 (2.8kg/人/日) と比べてもやや低かった (図 2)。

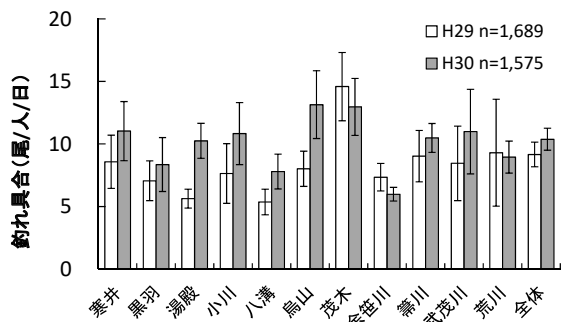


図 5 地区別の釣れ具合 (漁期全体)

エラーバーは標準偏差を示す。

**出漁日数** 釣りの出漁日数は 12.9 日/人で、前年 (13.8 日/人) の 93.5%、平年 (20.7 日/人) の 62.3% となった (図 6)。

一方、投網の出漁日数は 11.7 日/人で、前年 (11.1 日/人) から微増し、平年 (11.2 日/人) をやや上回った (図 6)。

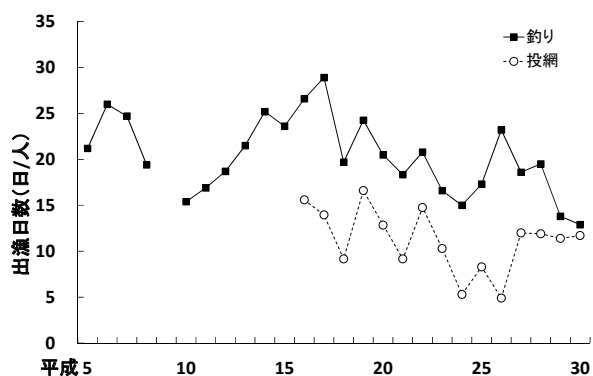


図 6 釣りおよび投網の出漁日数の推移

**釣獲尾数・漁獲量** 釣りによる漁獲量は 131.7t で前年 (146.1t) から微減した (図 7)。地区別では、烏山が最も多く、寒井、湯殿、小川、八溝、荒川の計 6 地区で昨年を上回った (図 8)。

投網による漁獲量は 36.5t で、前年 (52.5t) の 70% だった (図 7)。地区別では、烏山で昨年を上回った。一方、八溝、茂木、荒川では大きく減少した (図 9)。

**出漁者数** 釣りの出漁者数は 12.7 万人で前年 (13.7 万人) の 93% に減少し、調査開始以来最も少なかった (図 10)。

投網の出漁者数は 1.7 万人で前年 (1.9 万人) の 89% に減少した (図 10)。

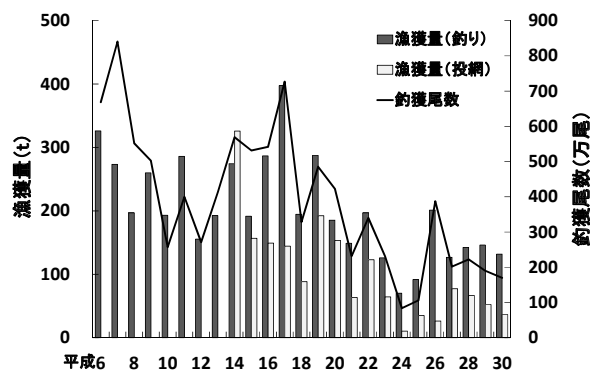


図 7 釣りおよび投網による漁獲量および釣獲尾数の経年変化

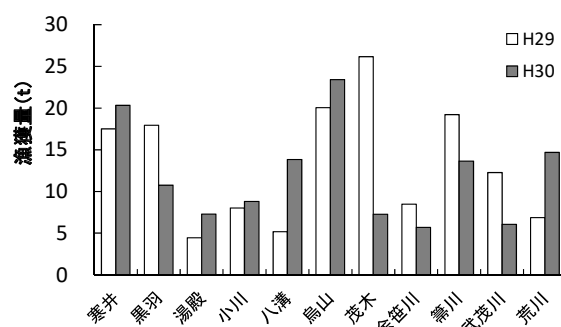


図 8 地区別の漁獲量 (釣り)

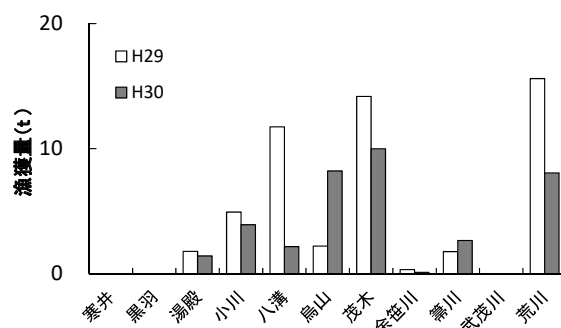


図 9 地区別の漁獲量 (投網)

※寒井・武茂川地区は釣り専用区

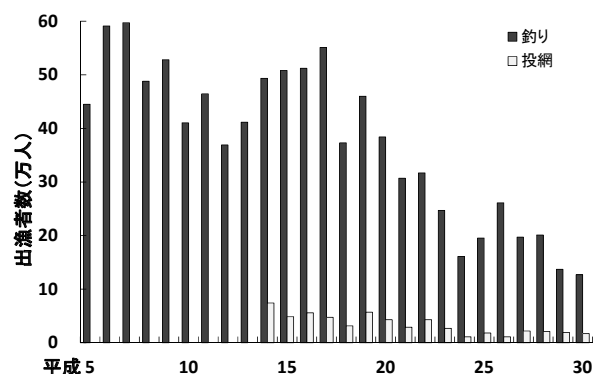


図 10 釣りおよび投網出漁者数の推移

(指導環境室)